

吸血鬼の血



フローレンス・マリヤット

新訳・解説・注釈付き

Infinito Verlag

Florence Marryat

『吸血鬼の血』 『ドラキュラ』
と同じ1897年に生まれた、も
うひとつの吸血鬼小説 新訳・解
説・注釈付き

Dieses ebook wurde erstellt bei

neobooks.com

Inhaltsverzeichnis

Titel

目次

本版について 新しい日本語訳について

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

第六章

第七章

第八章

第九章

第十章

第十一章

第十二章

第十三章

[第十四章](#)

[第十五章](#)

[第十六章](#)

[第十七章](#)

[第十八章](#)

[1. フローレンス・マリヤット——再発見されるべきヴィクトリア朝作家](#)

[2. 1897年——もう一つの吸血鬼小説](#)

[3. ハリエット・ブラント——吸血鬼、犠牲者、異邦人](#)

[4. 血、遺伝、退化](#)

[5. 帝国、人種、植民地主義](#)

[6. レ・ファニュの『カーミラ』から精神的吸血鬼へ](#)

[7. 心霊主義と不可視の吸血](#)

[本文注](#)

[用語集](#)

[年表——文学における吸血鬼](#)

[後記——血を飲まない吸血鬼](#)

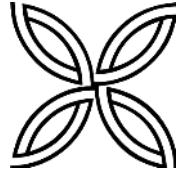
[技術情報](#)

論考・資料

[Impressum neobooks](#)

目次

Florence Marryat



『吸血鬼の血』 『ドラキュラ』と同じ1897年に生まれた、もうひとつの吸血鬼小説 新訳・解説・注釈付き

本版について 新しい日本語訳について

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

第六章

第七章

第八章

第九章

第十章

第十一章

第十二章

第十三章

第十四章

第十五章

第十六章

第十七章

第十八章

論考・資料

1. フローレンス・マリヤット——再発見されるべきヴィクトリア朝作家

2. 1897年——もう一つの吸血鬼小説

3. ハリエット・ブランド——吸血鬼、犠牲者、異邦人

4. 血、遺伝、退化

5. 帝国、人種、植民地主義

6. レ・ファニユの『カーミラ』から精神的吸血鬼へ

7. 心霊主義と不可視の吸血

本文注

用語集

年表——文学における吸血鬼

後記——血を飲まない吸血鬼

本版について 新しい日本語訳について

本書は、フローレンス・マリヤットの小説 *The Blood of the Vampire* (1897年) を、新たに日本語へ訳したものである。原作はブラム・ストーカーの *Dracula* と同じ1897年に刊行されたが、その後の名声には大きな差が生まれ、長いあいだ英語圏においても十分に顧みられてこなかった。近年では、ヴィクトリア朝末期のゴシック文学、女性吸血鬼表象、心霊主義、遺伝と退化をめぐる言説、さらに植民地主義的想像力を考えるうえで重要な作品の一つとして、あらためて研究と読解の対象となっている。

今回の翻訳では、原文の意味を正確に伝えることを第一としながら、英語の語順や構文をそのまま移した不自然な日本語にならないよう注意を払った。マリヤットの文章には、軽快な会話、十九世紀末の小説に特徴的な説明的な語り、そして感情の高まりを伴う長い文章が共存している。そのため、現代の日本語として無理なく読み進められる流れを保ちつつ、原作の時代性や語りの抑揚まで均質化してしまわないことを重視した。

翻訳に際してもう一つ重視したのは、登場人物の感情や超自然的な出来事について、原文以上の説明を加えないことである。本作における「吸血鬼性」は、明確な怪物の姿をとって現れるわけではない。ハリエット・ブランドが周囲の人々に及ぼす影響についても、医学的、心理的、超自然的な説明が互いに重なり合い、最後まで完全な決着を見ることはない。この曖昧さは作品の根幹にかかわるため、訳文においても特定の解釈へ読者を誘導しないよう努めた。

十九世紀末の作品である以上、現代の読者にとって不快、あるいは問題を含むと感じられる人種観、植民地主義的表現、女性観、医学的言説も登場する。本書では、それらを現在の価値観に合わせて書き換えたり削除したりせず、作品が成立した歴史的環境の一部として保持した。必要な背景については本文そのものを改変するのではなく、解説および注釈によって補う方針を採っている。

底本と編集方針

本訳では、1897年刊行のタウホニッツ版に基づいて作成された英語電子テキストを主要な底本とした。翻訳にあたっては、原作の章構成、段落の流れ、会話の順序を尊重し、原著には存在しない章題や小見出しは追加していない。したがって、本文は原作と同じく全十八章から成り、各章は番号のみで示している。

原文に見られる明らかな誤植や転記上の不整合については、作品の意味を変えない範囲で整理したが、綴りや言い回しを現代英語へ置き換えるような全面的な近代化は行っていない。同様に、日本語訳についても、文章を過度に古風にすることは避けながら、登場人物が十九世紀末の社会に生きる人々であることが失われない程度の距離感を残した。

会話文では、人物の社会的立場、互いの親密さ、感情の強弱が伝わるよう調整した。ただし、英語に表れる階級差や地域差を、日本語の特定の方言や極端な役割語へ機械的に置き換えることはしていない。たとえば、マダム・ゴベリの粗野さや押しの強さについては、特定の日本語方言で戯画化するのではなく、語彙、文のリズム、言葉遣いの直接性によって表現した。

作中にはフランス語その他の外国語表現も散見される。物語上の効果を持つものについては原語の性格を尊重しつつ、日本語読者が文脈を失わないよう処理した。本文を理解するために特別な知識が必要となる語句については、必要に応じて注釈で補っている。

人名・地名・歴史用語の表記について

人名および地名は、日本語における一般的な音写の慣例と、原語の発音とのバランスを考慮して表記を統一した。主人公 Harriet Brandt は「ハリエット・ブランド」、Anthony Pennell は「アンソニー・ペネル」とし、同一人物について複数の表記が生じないよう全編を通して統一している。

地名についても、現在の日本語で広く用いられている表記がある場合にはそれを優先した。一方、作中固有の建物名や施設名などについては必要に応じて音写を用い、初出時または注釈において意味を補っている。

とりわけ注意を要するのは、十九世紀の人種、植民地、医学、遺伝に関する語彙である。たとえば“Creole”という語は、時代や地域によって指し示す範囲が異なり、一義的な現代日本語へ置き換えることが難しい。さらに本作では、この語そのものが十九世紀の英国植民地社会における分類意識や人種観と結びついて用いられている。そのため、本文では文脈に応じた表記を選びつつ、必要な歴史的背景については注釈および解説で補うこととした。

また、本作に登場する遺伝、退化、生命力、神経、気質などに関する説明は、十九世紀末の医学、自然科学、さらには当時広く流布していた疑似科学的言説と深く結びついている。これらは現代医学の知見として提示されているものではない。本書では、当時の思想的・科学的環境を構成する言説として原文の内容を尊重し、現代の科学的事実と混同されないよう、必要な箇所に解説を加えている。

本版の目的は、作品を現代化して別の物語に作り替えることではない。1897年の読者がこの小説に感じたであろう不穏さ、矛盾、偏見、そして魅力を可能な限り残しながら、現代の日本語読者が自然に読み進められる形で提示することにある。

第一章

夕食の時刻——ホテルにとっては、いわば一日の魔法の時間だった。ハイストの長い堤防遊歩道には、もうほとんど人影がなく、その裾に沿って延びる柔らかな黄砂の帯も同じように閑散としていた。その一方で、各ホテルの定食食堂は急速に客で埋まりつつあった。

ホテル・リオン・ドールでいちばん若い給仕アンリは、入口の両側に威勢よく立つ二頭の大きな金色の獅子像にはさまれた階段に立ち、まだ戻ってこない客たちを呼び集めるため、耳障りな大音響の鐘を力いっぱい鳴らしていた。脇の小さなサロンで夕食の始まりを待っていた婦人たちは、その騒音を少しでも和らげようと両耳をふさいでいる。フィリップとジュールは、食堂の外に張り出した開放的なバルコニーで、白いクロスやグラスを大理石のテーブルに並べるのに忙しかった。そこではホテルの宿泊客でない者でも、望めばアラカルトで食事ができた。

中の細長いテーブルには埃をかぶったゼラニウムやフクシアが飾られ、調味料立ての取っ手には、薄汚れた造花の小さな束が一つずつ結びつけられていた。しかしリオン・ドールの客は大半がイギリス人で、夕食にありつくことのほうに夢中だったから、周囲の趣味の悪さをとやかく言う者はいなかった。

ゴベッリ男爵夫人は、片側に夫、もう片側に息子を従え、真っ先に席へ着いた。男爵夫人はいつもスープと同時に姿を現す。早く来た者のほうが、遅れて来た者よりもたっぷりよそってもらえると気づいていたからである。

男爵夫人一家の向かいに座るパレン夫人と、その友人レイトン嬢には、そんな心配はなかった。定食の始まりにたいいてい出されるクルトン入りのスープを、それほどありがたがってはいなかったからだ。

やがて長いテーブルは、イギリス人、ドイツ人、ベルギー人の雑多な一団でいっぱいになった。誰も彼も盛んにしゃべり、ことに外国人たちは舌が回るかぎりの速さでしゃべり続けていた。その中

には子供も何人か混じっていたが、大半は行儀が悪く、たびたび注意されなければならない。それを見るたび、レイトン嬢の唇は嫌悪で歪んだ。

彼女のちょうど向かい、ゴベッリ男爵夫人が最初の結婚でもうけた息子ボビー・ベイツの隣には、一脚だけ空いた椅子があった。男爵夫人はボビーを、いつも十歳の少年のように扱っていた。その空席は予約済みであることを示すように、椅子の背をテーブルに預けて立てかけられていた。

「きっと、ラモン夫人がしょっちゅう話しているドイツの王女さまの席じゃないかしら」

エリナー・レイTONはパレン夫人に囁いた。

「今朝、今日の午後にはいらっしゃるはずだって言っていたでしょう」

「まさか」友人は答えた。「王族のことはよく知らないけれど、王女さまが一般客と一緒にの定食テーブルでお食事になるとは思えないわ」

「まあ、ドイツの王女ですって！それが何だというの？」

レイTON嬢はまた唇を反らせた。彼女はウォルサムストウ卿の娘で、自国以外の貴族などほとんど価値のないものと思っていた。

だがそう口にしたその時、向かいの椅子がさっと引き出され、一人の若い女が腰を下ろした。そして厚かましいというほどではないにせよ、いささか大胆な目つきで、長いテーブルの端から端まで、さらに左右の隣席の者たちまで見渡した。

ひどく人目を引く娘だった。美しいというより、まず目立つ、と言ったほうが近い。彼女の美貌は一目見ただけでは気づきにくかったのである。背は高いが、身体つきはほっそりとしてしなやかだった。椅子の上で気軽に左右へ身体を揺らすさまは、まるで骨がないようにさえ見える。肌にはほとんど血色がなかったが、澄んでいた。目は細長く、暗く、幅が狭い。重そうな瞼と濃い黒睫毛があり、その睫毛は頬に影を落としていた。眉は弧を描き、繊細な線で引いたように整い、鼻はまっすぐで小さい。

ただし口だけは違った。大きな口で、唇は濃い血の色をしており、その間から小さな白い歯が覗いていた。そして何より目を引くのは髪だった。柔らかく、艶を抑えた青みがかった黒髪が豊かに頭を覆い、首筋に無造作な塊となってまとめられている。その様子は、櫛や簪などというものに馴染んだことがないかのようだった。

服装はきわめて簡素で、白いカンブリックのドレス一枚だった。しかしそこに居合わせた女たちのうち、五分も経たないうちに、ふんだんにあしらわれたレースが高価なヴァランシエンヌであり、喉元を留めているのがダイヤモンドであることに気づかなかった者は一人もいなかった。

新しく来た娘は、自分に向けられている数多くの視線にも少しもひるむ様子を見せなかった。きわめて平然と観察されるに任せ、誰に対してもどこか人目を忍ぶような微笑を浮かべていた。だが前菜が回され始めると、注意のすべてを自分の皿の中身へ向けた。

レイトン嬢は、若い女性がこれほど貪欲に、しかもこれほど楽しそうに食べるところを見たことがないと思った。どうしても目を離せなかった。ゴベツリ男爵夫人も食べ方はずいぶん粗雑で、食べ物を皿じゅうに散らし、しばしばテーブルクロスにまでこぼしたが、それでもこの若い見知らぬ女には及ばなかった。

娘が特別に速く食えるとか、食欲が旺盛だというだけではない。まるで誰かに取り上げられるのを恐れているかのように、食べ物から一瞬も目を離さないのである。皿が空になると、ただちに給仕をフランス語で鋭く呼びつけ、もう一皿持ってくるよう命じた。

「そう、それでいいのよ、お嬢さん！」

男爵夫人は巨大な頭をうなずかせ、新参者に満面の笑みを向けた。

「もっと持ってこさせなさい！ これは実にうまい料理だよ。あたしももう一皿もらおう！」

フィリップが前菜の最後の一人前を若い娘の皿に載せると、男爵夫人は自分の皿を彼の鼻先へ突き出した。

「ほら！男爵とボビーとあたしの分、あと三人前持っておいで！」

給仕はもう料理が残っていないという意味で首を振った。しかし男爵夫人は、そんな薄っぺらな言い訳で引き下がる女ではなかった。たちまち騒ぎを起し始めた。この恐るべき女とホテルの使用人とのあいだで何らかの口論が起こらずに、一度の食事が終わることとはほとんどなかった。

「ほら、また始まったわ」

レイトン嬢はパレン夫人の耳元で呟いた。給仕は別の前菜を持ってきたが、男爵夫人は仔牛の頭肉と茸の料理をもう一皿よこせと言い張った。

「イル・ニ・ヤ・プリュ、マダム——もうございません、奥さま」

フィリップは恐縮した身振りを添えて断言した。

「何だって？」

フランス語の不得手な男爵夫人が尋ねた。

「もうないんだよ、マイン・ディア」

夫が強いドイツ訛りで答えた。

「なんて生意気な連中だ！」

妻は顔を赤らめた。

「ほら、ムッシューをすぐここへ呼んでおいで！このろくでもないホテルで、客に腹いっぱい食わせないつもりなのか、あたしが確かめてやるよ！」

意味の分かった婦人たちは皆、その言葉遣いにぎょっとした。しかしゴベッリ夫人には何の関係もなかった。彼女はしばらくのあいだ、間を置いては「ムッシュー！」と大声で呼び続けたが、そのうち自分抜きで食事が終わりにかけていることに気づき、今は食べるほうに専念し、喧嘩はもっと都合のよい時まで延期したほうが賢明だと判断した。

ゴベッリ男爵夫人は、ホテルにいる大半の人間にとって一種の謎だった。象を思わせるほど巨大な体格の女で、大きく平たい顔、無骨な手足をしていた。肌も粗く、髪も粗く、顔立ちそのものも粗

野だった。さもないければひどく不快に見えただろう顔を救っているのは、人のよさそうでありながら狡猾さも宿す青い目と、丈夫そうな白い歯並びだけだった。

男爵夫人がもともと何者だったのか、誰にもはっきりとは分からなかった。教育も作法も欠けているところから見て、卑しい境遇の出であることは明らかだった。それなのに彼女は貴族の名、時には王族の名さえ、まるで身近な知人であるかのように口にし、その家族や邸宅までよく知っているふうだった。

昔のベイツ氏が彼女と結婚する前、彼女は彼の料理女だったのだという噂もあった。ベイツ氏が死んで、一人息子と相当な財産を彼女に残した時、この小柄なドイツ男爵は、その金なら彼女の人柄を埋め合わせるだけの価値があると考えたのだ、と。

彼女はこのうえなく俗悪で、怒ればこのうえなく口汚かった。しかし機嫌がよい時には粗野ながら人のよいところもあり、知性の代わりを務めるほど生まれつきの抜け目なさも備えていた。ただし良心の呵責なく嘘をつき、そのことを恥じるどころか、むしろ自慢していた。

自由に使える金がたっぷりあったため、彼女はしばしば人に激しい熱を上げた。突然ある人物を気に入り、気の済むあいだは贈り物や親切を惜しみなく浴びせ、それに飽きると、理由もなく同じくらい突然に見捨てる。穏便に追い払えなければ、侮辱してでも遠ざけた。

男爵は完全に妻の尻に敷かれていた。それどころか、彼女の前では卑屈なほど従順だった。その事情を知らない者には不思議に思えたが、男爵夫人は数ある尊大な主張の一つとして、ある種の超自然的な、目に見えない存在と交流しており、それらの存在は彼女を怒らせた者すべてに復讐できるのだと公言していたのである。

その恐怖に加え、金をすべて握っているのが妻であり、こと夫に関しては財布の紐をきつく締めているという現実もあって、男爵は奴隷のように妻の意向に従っていた。

男爵夫人の心の中でいちばん柔らかな場所は、おそらく病弱で魅力にも乏しい息子ボビー・ベイツのために取ってあったのだろ

う。もっとも、その愛情の示し方は、虎が子を扱うように荒っぽかった。彼女は夫以上に息子を監視し、ボビーは十九歳にもなっていたのに、母親の前では鷺鳥に向かって「しっ」と言う勇氣さえなかった。

チーズが回される頃、エリナー・レイトンは苛立たしげな動作で席を立った。

「マーガレット、お願いだからこの空気の中から出ましょう。もう本当に耐えられないわ」

二人はテーブルを離れ、バルコニーの外へ出た。堤防遊歩道には、しばらく休んでレモネードやラガービールで喉を潤したい通行人のために、彩色された鉄製の椅子とテーブルがいくつも置かれていた。

「あの娘、いったい誰なのかしら」

もう声が届かないところまで来ると、パレン夫人が言った。

「好きか嫌いか、自分でもまだ分からないけれど、どこか気品のあるところがあるわね」

「そう思う？」レイトン嬢は言った。「私には、鶉みたいに食べることでしか目立っていなかったけれど。社交界にいる人があんなふう to 食べ物をつがつ呑み込むなんて、見たことがないわ。本当に気分が悪くなったくらい」

「そこまでひどかった？」

もっと穏やかな性質のパレン夫人は、さほど関心もなさそうに答えた。その時、乳母車に乗せられた自分の赤ん坊が目に入り、立ち上がって迎えに行った。

「どうだった、ナース？」

ほんの一時間前に別れたばかりとは思えないほど心配そうに尋ねる。

「ずっと起きていたの？」

「はい、奥さま。ずっとあちこちをご覧になっていました。でも今は眠くなってきたみたいです。そろそろ中へお連れしたほうがよいかと思ひまして」

「まあ、だめよ。こんなに暖かくて素敵な晩なのに。外で眠ったって害にはならないわ。ここへ置いて行って。それより中へ戻って、今日の夕食で私の向かいに座っていた若いお嬢さんの名前を聞いてきてちょうだい。フィリップなら英語が分かるから、教えてくれるでしょう」

「いったい、どうしてそんなことを知りたいの？」

召使が立ち去るのを見ながら、レイトン嬢が尋ねた。

「さあ、自分でも分からないわ。ただ少し気になるだけ。あんなに若いのに、一人でいるみたいだから」

エリナー・レイTONは何も答えず、遊歩道を横切って海を眺めながら立った。彼女は婚約者であるリムリック・レンジャーズ連隊のラルフ・パレン大尉が来るのを待っていた。しかし彼は合流を遅らせており、エリナーはハイストをいささか退屈に感じ始めていた。

その頃にはリオン・ドールの宿泊客も食事を終え、海岸沿いに一定の間隔で並ぶ数々のカフェ・シャンタンへ繰り出す前に散歩をしようと、再び遊歩道へ集まり始めていた。

その中にゴベツリ男爵夫人もいた。片手で太い杖に重々しく寄りかかり、もう片方の手を夫の肩に載せている。二人がゆっくり遊歩道を往復する姿は、実に奇妙なものだった。

夫人はひどく背が高いうえに巨体で、連れより頭一つ分も大きくそびえている。対する夫は胴体だけなら一人前の大きさがあるのに、脚は短かった。大きな帽子を額深くまでかぶり、首らしい首がほとんどないため、帽子のつばが肩に直接載っているように見える。妻が身体を預けてくる重みに耐えながら、その横を腰を曲げて歩く姿は滑稽そのものだった。

それでも男爵夫人は、本気で夫を誇りに思っていた。男爵は均整の取れない体つきにもかかわらず、淡い水色の潤んだ目、長い鼻、赤みがかった金色の髪と髭を持つ、いかにも温和なドイツ人らしい顔をしていた。そのため、人によっては美男子と呼ぶに足ると思われていた。男爵夫人は、彼の頭部と顔がかつて何か有名な聖人

像のモデルとして描かれたのだという話を、会う人ごとに聞かせて飽きなかった。

一方、彼女自身の身なりは本当に滑稽だった。金はいくらでも持っているのに、趣味がないのか、服装そのものに無頓着なのか、通り過ぎるたびに誰もが振り返った。

この晩も、一ヤード十七シリングもする絹のドレスに高価なビロードの外套を合わせながら、頭にはごみ箱から拾い出したようなボンネットを載せ、指先が全部破れた綿手袋をはめていた。

レイトン嬢のそばを通りかかると、太い杖を彼女の顔の前で振り、周囲の誰にでも聞こえる声で叫んだ。

「それで、あのハンサムな大尉さんはいつあんたに会いに来るんだい、レイトン嬢？ 気をつけなよ、よその娘を追っかけてるかもしれないよ！『物思いに沈み、わがL・O・V・Eを想えば』ってね。ハッ、ハッ、ハッ！」

エリナーの頬は上品な薔薇色に染まったが、振り向きもせず、からかう女に何の反応も示さなかった。彼女はゴベツリ男爵夫人を心の底から憎んでいた。誇り高く冷ややかな性格の彼女には、男爵夫人の粗野さと馴れ馴れしさが生理的に受けつけられなかったのである。

「またその餓鬼に縛りつけられてるのかい！」

男爵夫人は、赤ん坊を眠らせておくため乳母車の取っ手を静かに前後へ動かしているマーガレット・パレンのそばを通りながら叫んだ。

「生まれた途端にたらいへ沈めちまえばよかったのに。ずいぶん手間が省けただろうよ！ あたしもあの悪魔のボビーをそうしとけばよかったって、しょっちゅう思うね。おい、ボビー、どこにいるんだ？」

「すぐ後ろだよ、ママ！」

素朴そうな青年が答えた。

「だったら父さんとあたしから逃げ出して、娘っ子に色目なんぞ使うんじゃないよ。そんなことをする時間はまだいくらでもあるだろう、なあ、ギュスターヴ？」

最後は男爵に向かって言った。

「さあ、ロベルト、来なさい。お母さんの言うことをよく聞くんのだ」

男爵は喉の奥から響くドイツ訛りで言った。そして異様な三人組は遊歩道を進んでいった。男爵夫人は道々、出会う人間という人間について、誰に聞かれても構わない声で評を加えていた。

マーガレット・パレンはその場に残り、乳母車をゆっくり揺らしながら、エリナーと同じく静かな海面へ目を向けていた。八月の太陽はすでに完全に沈み、ハイストの砂丘につきものの、形容しがたいほどかすかで、それでいて不快な匂いが漂い始めていた。あたり一帯には静かな倦怠が忍び寄り、空気には雷雨の兆しがあった。

彼女は夫、アーサー・パレン大佐のことを考えていた。エリナーの婚約者の兄であるアーサーは、妻と赤ん坊のためにインドで働いている。

幸福な結婚生活がわずか一年しか経っていない時に、夫を一人でインドへ送り出さなければならなかったことは、マーガレットにとってひどい打撃だった。しかしちょうど娘の誕生を控えていたため、あれほど長い旅へ同行することはできず、残らざるを得なかったのである。

いまや赤ん坊は生後六か月になり、パレン大佐はクリスマスまでには帰国できる見込みだったため、それまで待つよう妻に勧めていた。それでもマーガレットの思いは、時に暗い方へ傾いた。

この世では、出来事はあまりにも突然起こる。自分と夫が本当にもう一度会えると、誰が断言できるだろう。アーサーがこの小さな娘を見る日が来ると、あるいは自分自身が生きて娘を父親の腕に抱かせられると、誰が保証できるだろう。

もちろん、そんな考え方が病的であることは本人にも分かっていた。だからたいていは、意識して振り払うようにしていた。

頼んでいた情報を手に入れて乳母が戻ってきたため、マーガレットは物思いから覚めた。

「奥さま、あのお嬢さんのお名前はブランドとおっしゃるそうです。フィリップによれば、ロンドンから来られたとか」

「イギリス人なの！ とてもそうは思わなかったわ」パレン夫人は言った。「フランス語があんなに上手なんですもの」

「赤ちゃんをお預かりしましょうか、奥さま？」

「ええ。遊歩道を乳母車で連れていって。あとでこちらから会いに行くわ」

召使が言いつけどおりに動き出すと、彼女はレイトン嬢を呼んだ。

「エリナー、こっちへ来て」

「何？」

レイトン嬢は隣へ腰を下ろした。

「あの新しく来た娘、ブランドっていう名前で、イギリスから来たんですって。信じられる？」

「そんなことを想像してみようと思うほど、あの人に興味を持たなかったわ。気づいたのは、耳まで届きそうな大きな口をしていて、豚みたいに食べるくらい。どこから来ようと、私たちに何の関係があるの？」

ちょうどその時、モンタギュー夫人がホテルの階段を降りてきた。彼女は夫とともに九人の子供をブリュッセルへ連れていこうとしていた。イギリスより安く暮らせるという、誤った思い込みからである。その九人のうち六人ほどがスカートにまとわりついていた。モンタギュー夫人はまっすぐマーガレット・パレンのところへやって来た。

「まあ、パレン夫人！ 夕食の時、あなたの向かいに座っていた若いお嬢さん、何というお名前？ みんな聞いたがっているのよ！ ものすごいお金持ちで、一人旅をしているって聞いたわ。あのドレスのレースをご覧になった？ 本物のヴァランシエンヌよ。それにダイヤモンドの指輪も。フレデリックが、相当な値打ちだろうって言っていたわ。きっとずいぶん身分のある方なんじゃないかしら」

「ところが、乳母が聞いてきたところではイギリス人で、名前はブラントですって。こちらにお友達はいないの？」

「ラモン夫人によると、もう一人若い女性と一緒に来たそうだけれど、ホテルでは別々の場所に部屋を取っているんですって。なんだかとっても変じゃない？」

「それに、ずいぶん不作法な話に聞こえるわ」

エリナー・レイトンが口を挟んだ。

「あの人とは、なるべく関わらないほうがよさそう。こういう場所では、どんな人間と知り合いになるか分かったものじゃないもの。この定食テーブルの動物園を端から端まで眺めていると、ときどき本当に気分が悪くなるわ」

「そう？」モンタギュー夫人は応じた。「私は面白くて仕方がないけれど。たとえば、あのゴベツリ男爵夫人——」

「私の前であの人の名前を出さないで！」

レイトン嬢は嫌悪を露わにして叫んだ。

「あの女は文明社会に置いておける人間じゃないわ」

「確かに少し品がないし、振る舞いも変わっているけれど」モンタギュー夫人は言った。「でも、とても気立てがいいのよ。昨日なんて、うちの小さなエドワードにルイ金貨を一枚くださったの。受け取らせるのが恥ずかしいくらいだったわ」

「それこそ、あの人の下品さを証明しているのよ」

自分自身には他人にやれる六ペンスさえないエリナー・レイトンが断言した。

「お金さえ出せば、ほかの欠点は全部埋め合わせられると思っているってことでしょう。先週ここを発ったテイラー嬢には、自分の喉元から高価なブローチを外して渡したのよ。散々汚いことをさせて、さんざん嘲笑った代償にしては安すぎるくらいだけれど。この成金娘も、同じやり方で私たちの機嫌を取ろうとするんじゃないかしら」

その時、ちょうど話題にされていたブラント嬢が、彼女たちの座っている場所からほんの数フィート高いだけのバルコニーに姿を

現した。夕食の時と同じドレスで、肩にふわりとした小さなショールを掛けている。

彼女は微笑みながら、当然ながら自分についての話をぴたりとやめた婦人たちをしばらく眺めていた。それから思い切ったように、二頭の金色の獅子像のあいだの階段を下り、どこかおずおずした様子で彼女たちの近くに立った。

パレン夫人は、新しく来た人を完全に無視するほど無礼にはなれないと思った。そこでレイトン嬢を大いに不快がらせながらも、静かに声をかけた。

「こんばんは」

ブラント嬢には、それだけで十分だった。顔いっぱいには笑みを広げ、すぐ近くまで寄ってきた。

「こんばんは！　ここって素敵ですね。こんなに柔らかく暖かくて——島に少し似ているけれど、ずっと爽やかです！」

今では大勢の行楽客で埋まった遊歩道を上下に見渡し、満ち足りたように長く息を吸った。

「みんな、なんて楽しそうで幸せそうなんでしょう。それに私も、とても幸せ！　もし思いどおりにできるなら、私が何をしたいか分かります？」

彼女はパレン夫人に尋ねた。

「いいえ、何かしら？」

「この道を、ありったけの速さで端から端まで駆け回りたいんです。両腕を頭の上に振り上げて、大声で叫びながら！」

婦人たちは驚いて顔を見合わせた。しかしマーガレット・パレンは思わず微笑み、新しい知り合いに、どうしてそんなことをしたいのか尋ねた。

「だって、自由だからです——やっと自由になったんです。十年もの長い監禁のあとで！　本当のことですよ。本当にそうなんです。十一歳からずっと、あんな恐ろしい修道院に閉じ込められていたら、あなたたちだって同じ気持ちになると思います！」

「修道院」という一語を耳にした途端、国民的ともいうべきプロテスタントの嫌悪が、ほかの三人の婦人の顔に一斉に広がった。

モンタギュー夫人は、本当ならブラント嬢の話の続きを何より聞きたかったにもかかわらず、感染を避けるかのように子供たちを自分の周囲へ集め、その場から遠ざけた。エリナー・レイトンも椅子を少し離れた。

だがマーガレット・パレンは興味を持ち、娘に先を話すよう促した。

「修道院に？ では、あなたはローマ・カトリックなのね」

ハリエット・ブラントは眠たげだった目を突然大きく開いた。

「そうは思いません。自分が何なのか、私にもよく分からないんです！ もちろん修道院では、うんざりするほど宗教を喉の奥まで詰め込まれましたし、いるあいだはあの人たちのお祈りにも従わなければなりませんでした。でも、両親がカトリックだったとは思えないんです。まあ、もうどうでもいいことです。今は私が自分の主人なんですから。好きなものになれます！」

「では、ご両親を亡くされたのね。お気の毒に」

「ええ、もう何年も前です。それで後見人のトロローラーさんが、教育を受けさせるため私を修道院に入れたんです。それから十年ですよ！ ひどいと思いませんか？ 私はもう二十一歳なんです。だから自由になれたの！」

娘は親しげに身を寄せるような調子で話を続けた。

「両親は財産を全部私に残してくれたので、成人したと同時に自分のものになりました。後見人のトロローラーさんはジャマイカに住んでいます——私がジャマイカから来たって言いましたっけ？——それで、修道院を出たら自分と奥さんの家に住んで、生活費を払うものだと思っていたんです。でも私は断りました。あの人たちは私をあまりにもきつく縛っていたから！ 私は世界を見たかった。人生を見たかったんです。それだけをずっと楽しみにしてきたんですもの。だから財産の手続きが済むとすぐ、西インド諸島を出て、こちらへ渡ってきたんです！」

「ホテルでは、あなたはイギリスから来たと聞いたけれど」

「ええ、そうですよ！ 汽船がロンドンに着いたので、そこで一週間過ごしてからこちらへ来たんです」

「でもブラント嬢、あなたは一人で旅をするには若すぎるわ。イギリスの若い女性は、そんなことをしませんよ」

パレン夫人が言った。

「まったく一人というわけじゃありません。修道院で一緒だったオルガ・ブリumontも来ています。でも病気なので、今は二階にいるんです。ブリュッセルにいるお兄さんを訪ねて来たので、一緒に旅をしました。汽船では同じ船室だったんですが、オルガはひどく具合が悪くなって。ある晩なんて、お医者さまがもう死ぬかもしれないと思ったくらい！ 私はずっとそばにいました。夜も起きて看病したんですけれど、なかなかよくななくて。

ロンドンで泊まったのは、ドレスやいろいろなものを買いたかったからなんです。でもオルガは外へ出られなかったので、私が一人で行かなければなりませんでした。今、お兄さんがブリュッセルを留守にしている、迎えに行けるまでハイストにいてくれと手紙を寄こしたんです。それで私は別に行くところも決めていなかったから、一緒に来ました。でも、もうずいぶんよくなりましたよ。今日の午後なんて、ずっとぐっすり眠っています！」

「では、そのお友達があなたのもとを離れたら、どうするの？」

パレン夫人が尋ねた。

「さあ、分かりません。旅をするんじゃないかしら。自分の行きたいところなら、どこへでも行きます！」

「今晚、散歩へ行くんじゃないかったの？」

会話を切り上げさせようと、エリナー・レイトンが友人に低い声で尋ねた。

「もちろん行くわ。あとで乳母と赤ちゃんに合流すると言ってあるもの」

「じゃあ、帽子を取ってきましょうか？」

レイトン嬢は自分たちの部屋へ上がろうと立ち上がった。

「ええ、お願い。それから、冷えてきた時のためにビロードのケープも」

「私も取ってきます！」

ブラント嬢は勢いよく立ち上がった。

「私も一緒していいでしょう？ オルガに外へ出るって言ってきます。五分で戻りますから！」

返事も待たず、彼女は駆け去った。

「ほら、あなたがこんなことにしたのよ」

エリナーは腹立たしげに言った。

「私のせいじゃないわ」マーガレットは答えた。「それに、結局のところ何がいけないの？ 保護してくれる人のいない若い娘に、ほんの少し親切にするだけでしょ。私はあの子、嫌いじゃないわ、エリナー。確かに馴れ馴れしくて、何でもすぐ話してしまうけれど、考えてもみて。十年間も修道院の四つの壁の中に閉じ込められていて、突然、自分で自分のことを決められるようになって、お金まで自由に使えるのよ。どんな娘だって舞い上がって当然だわ。友好的に接するのを拒むなんて、ずいぶん意地悪だと思う」

「まあ、何事もなければいいけれど。外国のホテルでは、むやみに知り合いを作らないようにって、ラルフが注意していたのを忘れないでね」

「でも私はラルフの命令下にいるわけじゃないわ。あなたはそうかもしれないけれど。それに、あんなに気難しくて人を選ぶ紳士の助言に、何から何まで従いたいとは思わない。私のアーサーなら、未婚の若い娘に親切にしたくらいで、私を責めたりしないと確信しているわ」

「とにかくマーガレット、お願いだから、その新しいお気に入りのお嬢さんに私の私事を話すのだけはやめて。あなたの義弟と私が婚約していると聞いて、あの皿みたいな目をさらに見開くところなんて見たくないの」

「あなたがそう言うなら、もちろん話さない。でもラルフがここへ来ても、秘密にしておけるなんて本気で思っているの？」

「どうして無理なの？ 彼があなたの夫の弟だという以上のことを、誰が知る必要があるの？」

「もう今ごろは、もっとずっと詳しく知られていると思うわ」
マーガレットは笑った。

「あなたがウォルサムストウ男爵の令嬢、エリナー・レイトンだっという話は、私たちがここに来て二日目にはハイストじゅうに知れ渡っていたもの。その次にはきっと、あなたがパレン大尉と結婚する予定だという面白いニュースが続いたでしょうね。使用人たちの舌が動くのを止めることなんてできないでしょう？」

「まあ、そうですね」

エリナーは軽蔑を込めて口をすぼめた。

「でも私やラルフから、それ以上のことを知ることはないわ。私たちは、遊歩道で腰に腕を回し合って座るような『ハリーとハリエット』じゃないもの」

「それでも——兆候というものは出るものよ」

マーガレットは笑った。

「私たちには出ません！」

レイトン嬢は憤然と答えた。

その時、黄色い薔薇を飾った黒いレースの帽子をかぶり、胸元には小さなフィッシュを無造作に結んだハリエット・ブラントが、軽やかに階段を駆け下り、二人のところへ戻ってきた。

例として読む。ハリエットが周囲から生命を奪うという筋書きの中で、周囲の人々も彼女の金、愛情、才能、出自を絶えず利用しようとしている。誰が誰を消耗させているのかは、医師の言葉ほど単純ではない。

その問題は、作品の植民地的背景によってさらに深くなる。ハリエットの財産はジャマイカの農園に由来する。ゴベッリ夫人やラルフに代表される作中の英国社会は、帝国からもたらされた富を歓迎しながら、その富とともに現れた植民地生まれの身体には嫌悪と不安を向ける。ゴベッリ夫人は彼女の年収を称賛し、貴族との結婚さえ勧めるが、その出自が社会的な不利益になると知れば態度を変える。ラルフも美貌と財産には惹かれながら、混血の子が生まれる可能性を嘲笑する。帝国の富は欲しいが、帝国が生み出した歴史を自分たちの家族へ入れることは拒むのである。

ハリエットは、父の実験、母の残酷さ、農園の暴力、奴隷制後にも残る人種支配といった、自分が作り出したのではない過去を背負わされる。この物語の構図では、植民地における英国人の父と帝国制度の責任が、混血の娘の「血」へ転嫁されている。歴史的暴力の帰結は、社会制度の問題ではなく、ハリエットという一人の女性が内側に抱える災厄として語り直される。

ただし、この小説を一貫して人種差別を批判する作品として読み替えることもできない。語り手はしばしば、ハリエットの身体や感情を人種的な類型によって説明し、フィリップス医師の偏見を完全には否定しない。彼女の周囲で起こる死の配置も、遺伝的な「呪い」が実在する可能性を強く支えている。作品は人種科学の残酷さを露呈しながら、その想像力から自由ではない。この矛盾を取り除いてしまえば、小説が生まれた時代の不安も、ハリエットの悲劇が持つ複雑さも見えなくなる。

それでも、ハリエットの行動は、彼女に下された道徳的判決を絶えず裏切っている。衝動的で、残酷な幼年期の記憶を持ち、ラルフへの執着の中では攻撃的にもなる。しかし、本当に愛したアンソニーを傷つける可能性を知ると、自分の幸福を諦めようとする。彼から離れ、結婚すべきではないと告げるのである。アンソニーの死

後には財産をマーガレットへ遺し、両親から受け継いだと信じる災厄をこれ以上広げまいとして、自ら命を絶つ。

この結末を、ハリエットが本当に吸血鬼だったことの証明と読むことはできる。しかし同時に、それは吸血鬼だと信じ込まされた人間が、自分には生きる権利がないという結論へ追い込まれた結果でもある。彼女を直接殺す杭はない。代わりにあるのは、医師の権威、男爵夫人の罵倒、ラルフの人種的侮辱、両親についての物語、そして自分の愛が死をもたらすという確信である。ハリエットは怪物として退治されるのではなく、周囲から下された判決を受け入れ、自らその刑を執行する。

『吸血鬼の血』が長く『ドラキュラ』の影に隠れていたのは不思議ではない。ストーカーの小説には、記憶に残りやすい敵、追跡、対決、破壊の儀式がある。マリヤットの怪物は見ることも測ることもできず、その存在を確定する方法さえない。また、本作が後代の精神的吸血鬼像へ直接影響を与えたことを、一本の明瞭な系譜として証明するのも難しい。その遺産は、特定の作品に模倣されたことよりも、吸血鬼を別の形で想像し得る可能性を早くから示した点にある。死者ではなく生者、意図的な捕食者ではなく無意識の加害者、血液ではなく親密な関係を通じて生命を奪う存在である。

二十世紀後半以降、この小説が再び読まれるようになったのも、その可能性が新しい批評の問いと結びついたためだった。女性の欲望を病気として扱う視線、植民地生まれの主体を英国社会が排除する過程、人種科学と医学的権威の結託、心霊主義と近代科学の不安定な境界。かつては『ドラキュラ』から外れた変種に見えた要素が、むしろヴィクトリア朝末期を理解するための重要な交差点として読み直されたのである。本作の文学史的な価値は、ストーカーへ至る一本道の途中にあることではなく、その道とは別の吸血鬼文学がすでに成立していたと示すことにある。

もっとも、現代的な「人を疲れさせる人物」や「有害な恋人」という通俗的比喻だけに、ハリエットを還元するべきではない。彼女の物語が問うのは、単に危険な人物から距離を取る方法ではない。関係の中で消耗が生じたとき、その原因を一方の生まれつきの

本性だけへ帰してよいのか。誰かの存在が他者へ負担を与えたとき、その人全体を災厄として定義してよいのか。医学、家族、恋愛、共同体は、保護を名目として誰を隔離し、その人からどれほどの生を奪うのか。

ハリエット・ブラントが今なお不安を呼び起こすのは、彼女が古い怪物ではないからである。退治すべき牙も、封じるべき墓もない。あるのは愛されたいという激しい願いと、自分の愛が相手を破壊するかもしれないという恐怖だけである。読者は最後まで、彼女が本当に吸血鬼だったのか、それとも他人の偏見と恐怖によって吸血鬼にされたのかを完全には決められない。この小説が最後に残す恐怖は、ハリエットが生命を奪う存在だったかもしれないことだけではなく、一人の人間を吸血鬼だと説明する言葉が、ついにはその人間から生きる権利まで奪いうるということである。

技術情報

Colophon

UUID: 35840163-282f-4a89-9532-05f3e26cf7c9

This ebook was created with StreetLib Write

<https://writeapp.io>